８月号

ギラギラと
太陽が照りつける
涼しさを求めて
水あそびから
ジュースやさんごっこへと
遊びがひろがっていく
「さあいらっしゃい」
「おいしいジュースだよ」
今日も広幼の庭に
明るい歓声があがる

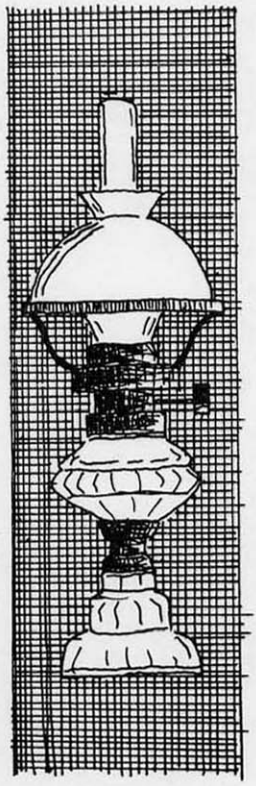
昭和57年８月１日
編集／発行
岡崎市教育委員会

（おいしいジュースだよ　―　広幡幼）

—教育随想—

真の喜びを味わう

鈴木超淳



近頃は楽しみ多く喜びが少ないせいで、多くは目の前の享楽を追い、苦労し耐え忍んで得る真の喜びを味わう人が少なくなってきたといわれます。

わが宗祖法然上人は十八歳から四十三歳まで満二十五年間比叡山で勉学修行せられ、ついに四十三歳、唐の善導大師のお導きにより、念仏の教えに出会われ、その時、嬉しさの余り感涙千行止まるところがなかったといわれます。真の喜びを味わわれたのです。

私の寺では昭和三十六年より毎年八月五日から二泊三日の修養会〝和順会〟を開催しております。小学校五年生以上中学生を集め、宗教的雰囲気を味わわせ正しい躾を身につけるようにと、二十年間続けてきました。

夜の行事で七時よりローソクの灯だけの暗い本堂で静かに正座させますが、今の子供は座る事が苦手で、すぐ足が痛くなります。〝暫くは絶対に動いてはいけません〟と言って見守っていますと、その痛さを辛抱し、さらに蚊が手足かまわず刺しますが、その痒さにも歯を食いしばって耐えております。

十五分程で止めますが、最後に感想文を書かせますと、その中で一番辛かったのは、夜本堂で正座した事だが、足の痛さに耐え、蚊に刺された痒さを忍んでやり遂げた後は、何とも言えない良い気持ちであったと書いてくれる子供が必ず一割位はあります。子供心に辛くても苦しくても耐え忍んで得ることのできる真の喜びを体験してくれるのです。嫌がるからやらせない、可哀想だからさせないというのでは、強い子は育たず、子供の真の幸せは望めません。

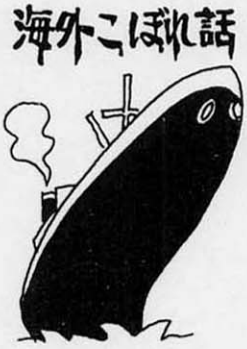
数年前の事ですが、和順会が終わり、手伝いの青年達が後片付けを始めてくれた時の事です。五人の子供が親の迎えが来るまで残って遊んで居りましたので、〝君達遊んでいるなら掃除を手伝ってくれないか〟と頼みました。すると一人の子供が〝掃除を手伝ったらいくらくれる？〟と言います。〝いや、お金はやらないが君達が汚したのだから手伝ってくれてもよいではないか〟と言いますと〝みんな帰った後で僕達だけに手伝いをさせるならそれ相当の報酬をくれなければいやだ〟と断りました。〝どうしても報酬がなければ手伝えないのか〟と聞きますと、〝だって、家で父がタバコを買って来てくれと百円くれる。母が手伝ってくれといえば小遣いをくれるのだから、ここでも手伝ったら金が欲しい〟と、きっぱり言い切りました。

この頃の子供は、人のため世のために奉仕する心、親や先生を敬う心が失われてきたと言われますのも、どうやら親や大人の姿勢、躾に問題があるように痛感しました。

子供がいやだと断ると金品で動かそうとしたり、仕方なく自分で用をしたりする。子供の言いなりになり、過保護に育てないで、時には苦労させ、耐え忍ばせる厳しさを持たなければなりません。子供達の心の底には厳しさに立ち向かい苦難を克服する体験をしてもよいという気持ちがあります。この体験をさせてこそ真の喜びを味わい生涯の幸せを生むものです。このような躾をすることが親や大人の実の愛情であり責任であると思います。

（荒井山九品院住職）

海外こぼれ話



ザルツブルグの夜

杉本安

ザルツブルグの国際音楽祭への参加は、ツアーの掉尾を飾る圧巻であった。たっぷり四日間をザルツで過ごせたのは、八年前に、宿がとれず国境を越えてドイツから二日通った時からの夢であった。

前夜の、ハイドン「四季」の興奮に倍加したモーツアルトの歌劇「魔笛」は、映画「サウンドオブミュージック」の場面にも出てきた、岩山をくりぬいたフェルゼンライトシューレの舞台である。

第一級正装が条件の参会だが、タキシードはないので、黒のスーツに蝶ネクタイ、女性はイヴニングドレスや人気が高い和装での晴れ姿である。ヨーロッパの音楽会と言えば、それは社交場である。

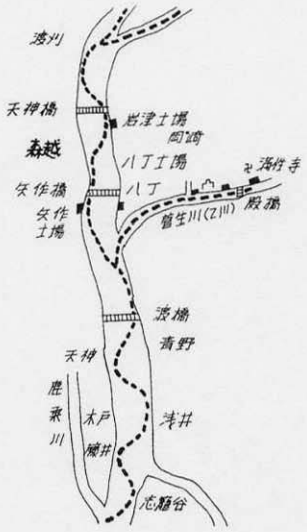
音楽ももちろんすばらしいが、たっぷり時間がとられた休憩時間、老夫婦が、カップルが、そこここでワインを傾け歓談している。われわれも負けてはおれずと、クジ引きで即製のペアを作ることとなった。

今までは、日本人独特の能率的コソコ

—ふるさとの山河—

矢作川 (5)

舟運



「川の流れは生の基盤だ」と、ある詩人は歌った。矢作川は『母なる川』であり川と結びついた地域住民の歴史がある。

木曽山脈を源にし、巴川、乙川など二百余の支流の水を集め、岡崎平野を潤し、三河湾に注ぐ全長百三十七キロの矢作川。その川に生命の水を求める人の数は、百万を越すが、川面を帆掛け舟が通い、筏が流れ、葦の茂みから船歌も聞えたという矢作川の姿を知る人は少なくなった。

江戸期になると、生産が高まり、商業が発達するようになった。江戸と大阪が経済の二大中心地となり、多くの物資が船によって輸送された。こうした動きにつれて、三河湾内の浦廻船の運航が盛んとなり、これが三河山間部の内陸と結ばれて、矢作川の舟運の発達を促した。

岡崎は、五万石の城下町。東海道の宿場町としての性格とともに、矢作川の舟運によって、浜と山間とを結ぶ湊町として発達。三州中馬の拠点でもあった。

中馬・三州馬に関連して舟運が盛んになると、矢作川には多くの川舟（三十石船）が行き交い、荷物を積み降ろす土場が築かれた。国道一号線矢作橋近くに、矢作土場・八丁土場ができ、菅生川では、御用・桜の馬場・満性寺の三つの土場が造られた。御用土場は藩米を、桜の馬場と満性寺土場は一般商品を扱った。積み荷は石製品が主で、揚げ荷は呉服・酒・瀬戸物・紙・塩など連尺商人の取り扱う品目が多かった。近くに芝居小屋（宝来座）も開かれ、土場人足の溜り場が置かれ、大変賑わったという。八丁土場は、原料の大豆、塩や重石が荷揚げされ、江戸表へ八丁味噌が積み出された。矢作土場（写真）は、川を上下する舟が停泊したり、船乗りの泊る宿屋もあったりして賑わったようである。青野、岩津土場は、主として肥料の荷揚げがされた。（明治三十年ごろに、三龍社が、菅生川左岸に石炭荷揚げ専用の土場を造った。）

川舟は、南風の吹く春から夏は白帆をあげるとスムーズに遡ることができ、河口の平坂から岡崎まで一日の行程であった。しかし、北風の吹く冬は、櫂で漕いで遡るのに三日もかかる重労働であったという。下りは早く、最上流の平戸・九久平土場からも朝早く出れば、その日の夕方には河口まで行けたようで、船乗りにとっては、下り荷が運賃稼ぎには一番良かったという。

このような川舟による物資の流通は、幕末から明治にかけて一段と多くなった。その舟運も、中央線開通による三州中馬の廃止、矢作川水利用の隆盛による水量の減少と砂の堆積による川舟の運航困難などにより、長い歴史の幕を閉じ、トラック輸送に次第に替わるところとなっていった。

（福岡中　金山登一）

芸術の都イタリア

天野伸子

かねてからの念願だったヨーロッパの旅、ついに実現！しかし、ローマまで二十三時間、苦痛な空の旅であった。

初めて見る真夜中のローマの町は、すばらしく美しい。照明灯に照らされたヴィットリオエマニエル二世の記念塔はひときわ美しく輝いていた。バスの中では、

「わあ」

「すごい。」

「すばらしい。」

の歓声。みんな興奮状態で、知らず知らず体に力が入り、苦痛だった空の旅の疲れも吹き飛んでしまった。

また、ミラノでは、ドウモの建築に感激をする。一三五の尖塔を持つイタリアゴシックの代表的な建造物は、とても人間の力で造られた物と思えないほど、実に見事なミラノファッションであった。

大理石のモザイクで飾られたエマニエル二世アーケードの通りも、近代都市に劣らないほど、芸術の香りが色濃く感じられた。

こんなにもすてきなイタリアの町、再び訪れて、ゆっくり一人旅をしてみたい。

（連尺小）

ソぶりを発揮していたお上りさんが、急に落ち着きあるヨーロッパスタイルに変身できたのは、何よりも効果的カップルの誕生がそうさせたのである。（緑丘小）

この重い体験

極限状況の中で，人間の尊厳を見つめた教師の姿をここにみる。
8月15日に寄せる秘話。

敵中行軍二千キロ

南中学校長
神谷　四士保

昭和二十年二月、私は初年兵二個中隊五百五十名を、南京近郊からベトナム国境近くの南寧へ引率する指揮官を命ぜられた。概算二千キロという気の遠くなるような行程である。予備士官学校を卒業して陸軍歩兵少尉に任官直後の大役、日ごとに戦局は昏迷の度を増していたから、素より生還は期しがたいと覚悟は決めた。

南京から揚子江を遡って武漢へ、後は陸路を武漢―長沙―衡陽―桂林―柳州―南寧へと南下する。米軍の艦載機にねらわれて日中の移動は全く不可能。持ち物は三日分の食糧、弾薬二百五十発、手榴弾二発、編上靴一足、小銃、軽機。その重さは三十キロを越す重装備である。一晩に三十キロの夜行軍、道傍にころがる死体につまずき、伝染病やシラミに身をさいなまれ、空襲・敵襲の恐怖の中を黙黙と南へ移動する毎日。それにしても歩兵とは歩くことであると、これほど思い知らされたことはない。

糧秣調達には殊のほか難渋した。塩の有難味もこの時に知った。一握りの岩塩で鶏卵三十個が手に入る。日本軍の軍票などは紙切れ同然。私の部隊は全員岩塩を一キログラムずつ背負わせていたので塩の売り食いで、かろうじて兵員の栄養失調を免がれた。途中の駐屯部隊とて当てにはならぬ。階級がもの言う世界の悲しさ。少尉の私に、欲しくばそこらで掠め取れと言わんばかりの応対。思いあまって、たとえ軍法会議にかけられようと部下を餓死させる訳にはゆかぬとばかりに、少尉の肩章をはずして大尉の肩章につけかえた。おかげでにらみが利いて以後は食糧確保が大変楽になった。

厳寒の南京を二月に出発して、炎熱の南寧到着は六月初旬。所要期間三か月半。兵員損耗率二割は常識とされた戦況の中で、わずか二十名の落伍だけで済んだのが、私の唯一の救いであった。それも岩塩と官名詐称のおかげかもしれぬ。

私と苦楽を共にする者の中から落伍者を出すまい、この折の感慨がその後の私の生き方の中にしみついた。

（文責・編集部）

金海君のことども

三島小学校長
岸田　達夫

ここに一通のはがきがある。差出人は金海とあるだけで、住所は記されていない、昭和二十二年六月九日消印、局名は判じ難い。裏面には、「今度朝鮮へ帰ることになりました　さよなら」とある。この古いはがきから、戦時下の教師であるわたしがよみがえってくる。

金原容尚、昭和十八年三島国民学校高等科一年在学の韓国人である。この十月わたしの新任教師としての一歩が始まっている。すでに戦局は末期、日本軍はニューギニア・ソロモン戦線から相次いで撤退しており、あくなき軍国主義教育はいっそう拍車がかけられていた。

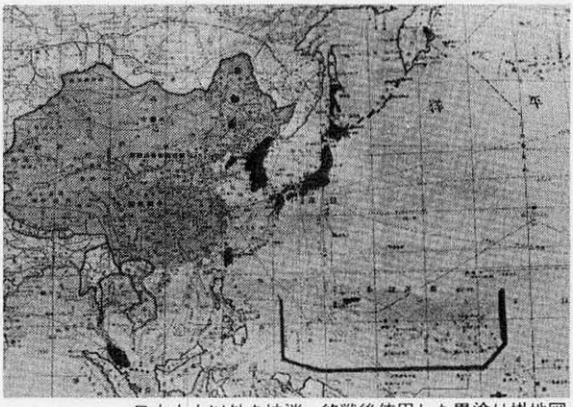
徴兵検査の結果、翌年四月入隊予定のわたしにとっては、最初にして最後となる半年間の教師の出発であった。時勢の赴くまま、若さからの血気と体力にものをいわせての日々である。軍歌、軍事教練的体操、加えて勤労奉仕といった国策教育である。もちろん教科内容もすさまじいものであったが、確かな記憶がないのはなぜであろうか。とにかく悔悟の念のみが残っている。

戦時下の生活は、食糧や物資の欠乏とのたたかいである。弁当持参もかなりの負担となり、持参し得ても内容は粗末きわまるものであったし、昼食抜きも決して珍しいことではない。

強引なまでに彼を宿直室に呼び、わたしの弁当の半分を与え始めたのは、欠食の事実を知ったからである。後になって父親が事故で失職をしたことを聞いたが、このような対応もついには彼一人だけではすまなくなった。が、せめてそれがわたしの良心的な教師の姿であった。

飢えた腹に、てれくさそうに貪り入れる少年たちの姿が今も彷彿としてくる。

それだけに「さよなら」の一言が、心にしみるのである。



日本本土以外を抹消，終戦後使用した墨塗り掛地図

子供と恩師ありて

甲山中学校長
浅井　浚一

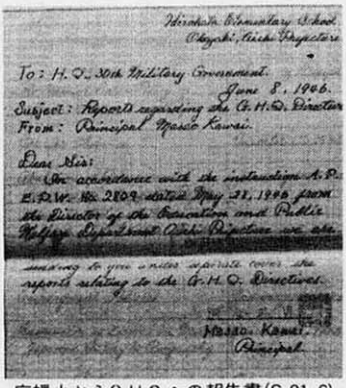
終戦当時へ遡ると、私も弱冠二十二歳という意気盛んな若者であった。終戦十日前に、外地から本土決戦に備え帰還、八月三十日には復員した。見方によっては実に幸運である。東岡崎駅頭に降り立った時、一望千里の焼け原に瞬時戦いた。自宅も焼失していたが、母妹の間借家は程なく見つかり安堵の胸を撫で下ろした。

広幡小出身の私は、赴任校も母校であったが、敗戦しかも将校という重荷は、私を子らの前には立たせようとはしなかった。どう釈明し、何を教えようというのか…悶々の日々が家に閉じ込めた。

ある日突然、校長（現羽根小河合教頭の父）より呼び出された。「子らは放っておけぬ、一日も猶予はない。」との厳命。重い足取りで翌日から出勤、三年の担任となった。衣類もなく飛行服のまま教壇に立つ。子らは飢えてはいたが、意外に明るかったのに救われた。戦地の話はしなかった。強い子にという思いがあったせいか、しばしば語気が鋭くなり、ビンタや正座も強要した。当時の子らには怖い先生の印象を与えたが、よく遊んだり校庭で作った芋も楽しく食べ合った。

こうした戦後の昏迷の中でも、いち早く私の心を支え、指針を与えてくれた次の二つの縁は、終生忘れ得ないものである。その一つは、鈴木幸生先生を師とした新絵画指導サークルの発足である。やがて全国を風靡した創造美育運動となり、さらには図工科指導要領の内容改変にまで至らしめたことである。今一つは、兵藤三平先生の元に集った読書サークルで、戦後間もなくから数年の短い期間ではあったが大きな感化を受けた。山本忠男・大須賀康宏・大賀真一といった面々十名ほどで、深夜まで先生宅で輪読会を開き、ご指導を賜ったものである。手刷りの機関紙も刊行されていた。

三島国民学校で行われた冷水摩擦（S18ごろ）



To: H. Q. 30th Military Government.
June 8, 1946.
Subject: Reports regarding the G. H. Q. Directives
From: Principal Masao Kawai.
Dear Sir:
In accordance with the instructions A. P. E. D. W. No. 2809 dated May 22, 1946 from the Director of the Education and Public Welfare Department Aichi Prefecture we are making to give a brief special report the reports relating to the G. H. Q. Directives.
Masao Kawai
Principal

広幡小からＧＨＱへの報告書（S 21.6）

終戦の日抹消の広幡小沿革誌

教科書を手離さなかった子ら

秦梨小学校長
浅井　千代子

終戦の日を迎えて間もなく、私達は住み慣れた平壌から、大同江を隔てた秋乙に集結させられることになり、私と長男（一歳）はそれに従った。

北鮮はソ連の支配下となったが、当時は治安が悪く、日夜を分かたぬソ連兵や朝鮮人の襲撃に怯えた。その上、男性の多くはシベリヤへ強制送還され、デマとも情報とも判断できかねる不安な話ばかりが飛び交った。

それでも三か月ほどたつと、食うや食わずの生活の中にも、平穏な日々が訪れるようになった。帰国の日を待ち佗びていた二月ごろであったと思う。教育経験者に集合がかかって、子供達に勉強を教えようという発案があり、数軒の民家の一室を借りて、学年分散学習ということになった。私は、三年生十名足らずを受け持った。「許可を受ける」などという手続きをとると面倒な事態になりかねないので、内密に事は運ばれた。だから、私達も子供達も、声を潜めて授業をした。校長先生は、苗字を忘れてしまったが、「甫」という方で、時々授業を見に来られた。

今、当時を思い起こしてみると、明日の命の保証などない生活の中でも、私をとりまく子供達は、教科書やノートなどを決して手離さなかった。それどころか宝物のように大切に持っていた。また、親も、生きるが精一杯という暮らしの中で、何よりも教育を優先にした。そういう親を見て、私達もまた、職業意識がむくむくと台頭して来たのである。

ところが、この試みもわずか二か月で終止符が打たれた。帰国のための流浪の生活が始まったからである。誰が祖国の土を踏み得たか、今は知る術もない。

（写真提供―内田松夫校長　三島小学校・広幡小学校）

教育日々

「発表の学習」を実践して

炎中　山内　博史

「発表を終えた時、すごく満足感があった。それに私の書いたTPが見本になった。本当にうれしかったなあ。」

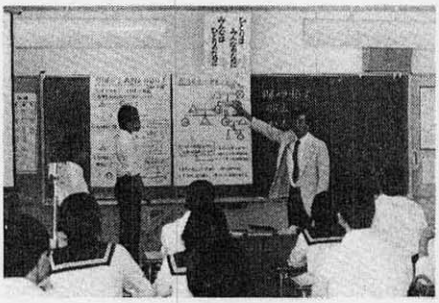
これは、発表の学習を終えた一生徒の感想の一部である。一時間の授業や単元全体の学習を終えた段階での生徒の感想を読むたびに、思ってもみなかった生徒の気持ちがわかり、はっとする。生徒がやる気を出し、意欲的に学習に取り組むようにと、我々教師は常に考え、授業の構成を考える。しかし、我々が意識していない教師の構えや一言に、生徒の気持ちが大きく揺れ動くものだということを最近つくづく感じている。

自らの問題を調べ、それをまとめ発表し、解決していく力を養うことは、社会科としての重要な目標の一つである。また、そのような過程を経る授業は、生徒の学習意欲の喚起や、自ら学ぶ態度の育成の面からも、欠くことのできないものであろう。

「初めは生徒が発表するからよくわからないかと思ったけど、なかなかよく、わかりよかった。」

これも一生徒の感想である。授業で忘れてならないことは、「授業がわかる」ことである。授業の形態や方法ではない。

本校に赴任し六年目になるが、この「発表の学習」を充実させようと、先輩を見習い、試行錯誤で今日まで来た。そして、今、授業を振り返り、反省してみると、一時間の授業が充実したものになるかどうかは、その一時間の授業の裏にあるいくつかの条件が、満たされているかどうかにかかっているのだということがわかった。



- 生徒に十分問題意識化がはかられている課題か。
- 生徒一人ひとりが課題を十分調べ、自分の考えを持って授業に臨んでいるか。
- 発表の資料、及び発表者への事前指導が十分なされたか。
- 単元構造や単元全体の学習の見通しを、教師は適切につかんでいるか。

この四つの条件が確実になしとげられてこそ、一時間の発表の学習は成功すると考えられる。これらが一つでも欠けている時、授業は失敗する。

自ら学ぶ力や態度を養うために、この「発表の学習」をより充実させ、しかも「わかる授業」となるように、今後とも努めていきたい。

ともだち

梅園幼　横山恵美子

年少組の時に一度も給食当番をやらなかったI子に、

「大きい組になったらやろうね。」

と時々約束したり、言いきかせていた。その約束どおり、年長になってからは嫌がらずにやっている。年少組へいっても当番の手伝いもしっかりやっているようすである。

ところが、また、

「給食当番やりたくない。」

と言いにきた。せっかくやるようになったのにと思いながら、

「今日だけなの。」

と尋ねるとうなずいた。

何とか励ましてやらせようかとも思ったが、意志を変えるような子供ではない。ここで無理じいすると、逆戻りするような気がして、今日だけと、念押しして次の子供と交代した。理由は教えてくれなかった。

そして二日後、絵本貸し出しの時、I子と仲良しのM子がやってきて、いろいろ話しているうちに、

「Iちゃん当番やらなかったのは、男の子ばっかりで、Iちゃん一人女の子だったからじゃない。」

と言った。

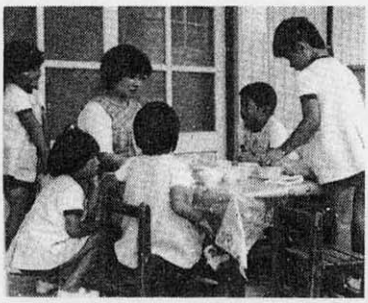
「Iちゃんに聞いたの。」

と尋ねると、

「ううん、聞かないけど私そう思ったの。」

I子に確認するとうなずいた。

中学生になる姉との二人姉妹のI子は、年少のころ、男の子と手をつながせようとしたり同じ机に座るだけで泣いたのである。



春の遠足は、年長児が年少の子の手をひいて歩いた。その時もI子は年少の男の子と組になり、今にも泣きだしそうな顔をしていた。いやなんだなとわかったが、わざと気づかぬ振りをしていた。そして、往復男の子を連れて歩いてくれたのである。

それにしても、男の子嫌いと、給食当番は嫌いというのが結びつかなったとは、うかつだったなと反省した。

同時に、さすが仲良しのM子だけあり、I子の心を見抜くとはと感心したのである。教師の心も見抜かれそうでこわい。

子供との毎日に真剣に立ち向かっていかなくてはと、わたし自身が心を引き締め直したできごとであった。

—おしらせ—

増える相談件数

—心の電話おかざき一周年—

昨年八月七日に発足した「心の電話おかざき」も、今月で丸一年を迎えることができた。本年四月からは、相談員も五十一名に増員され、種々の相談に対応できる体制が整ってきた。

六月六日まで、十一か月間の相談についてまとめてみよう。

1、相談件数

心の電話の相談対象は、小中学生とその保護者となっている。上の表で、この三者の相談件数が、約七十パーセントに達していることは、一応初期の目的を達しているとみてよいだろう。

総件数	一般	親	高校生	中学生	小学生
367	100	107	17	71	72
100%	26%	29%	5%	20%	20%

四月以降、小中学生からの相談がふえてきたことが、大きな特徴としてあげられる。

2、相談内容

○小学生の場合

目立って多いのは、友だちとけんかしたとか、学級でいじめられるといった内容である。

○中学生の場合

最近、性に関する相談がふえている。悩みというよりは、性への好奇心を満足させたいという内容で、こうした相談を受けると、学校でも正しい性知識をもたせるような指導が必要だと感じる。

先生方が見過ごしておられる些細なことに悩んでいる子どもたちのいることを知っていただけたら幸いである。

〔寄贈刊行物・資料等〕

◆国語科書写の授業　市教委
◆小学校社会科の授業(上)市教委
◆小学校算数の授業(上)　市教委
◆小学校理科の授業(上)　市教委
◆甲山教育　甲山中学校
◆この一冊　第19集　梅園小学校
◆美しく豊かな話しことばを求めて　矢作北小学校
◆草　笛　秦梨小学校
◆明日の岡崎を考える　岡崎市民大学運営委員会編
◆学級会活動　現職教育特活部
◆葵中の教育　—自律と感動—　葵中学校
◆自ら汗する教育　河合中学校

■昭和57年度　岡崎市教育研究論文の募集要項

○部　門
(1)第1部門　個人研究
(2)第2部門　共同研究

○字　数
四百字詰原稿用紙（B4・たてよこ自由）三十枚以内。表・グラフ・写真等は本文の字数に含める。

○提出期限
(1)中間報告書　9月4日(土)
(2)研究論文　12月1日(水)

○提　出　先
市教委学校教育課

○表　彰
最優秀賞・優秀賞・佳作

■竜美丘小女子バレーボール全国大会へ

去る六月二十日、一宮市で開かれた第二回全日本バレーボール小学生大会県大会で竜美丘小女子チームはみごと優勝し、来る八月十六日から東京で開かれる全国大会へ出場する。

■名古屋フィルハーモニー交響楽団　岡崎公演

八月一日、市民会館においてモーツアルト・コンチェルト名曲コンサートが開かれた。

その名演奏に、多くの聴衆は魅了された。

—昭和57年度　夏期実技講習会—

教科・領域	期日	場所	人数
国語	8・6	連尺小	100
書写	8・7	岩津市民センター	40
社会	8・6	現地学習(蒲郡他)	60
算数	8・7	矢作市民センター	50
理科	8・6	藤川小	60
図工・美術	8・6	岩津中	80
技術・家庭	8・7	豊田理化学研究所	35
家庭	8・6	大樹寺小	40
英語	8・6	矢作北中	45
特殊教育	8・7	福祉センター「友愛の家」	50
視聴覚(VTR)	8・6～7	連尺小	40
図書館	8・7	福岡小	50
保健	8・6	市役所6F	100
教育工学(アナライザー)	8・6・7	竜海中	各48

薬王寺刀匠跡の碑

所在地―岡崎市宇頭町

国道一号線、名鉄バス宇頭停留所の北隣に薬王寺がある。この寺、和銅年間に行基を開祖として建てられた。後年、今川義元が三河に侵攻した際、兵火に逢って西本郷町から現在地に移された。

日本最古の茶園があったとか、宝物の薬師瑠璃光如来（石像）の功徳が尊かったとか、伝わる話は多い。『本朝文粋』（藤原明衡選）にも登場する名刹であった。

碑はこの寺境内入口にある。竜城英万会の建立によるものである。

刀匠薬王寺久原住貞吉（文正年代）、同小原住貞守（弘治年代）とも、名刹にあやかって銘を刻んだものと思われる。『本朝鍛治工古刀銘鑑』に、薬王寺三河国矢矧庄と記され、西本郷寺南岩戸（旧寺跡近く）から、今もしきりに鉄屎（かなくそ）が出ることから察して、室町時代、三河きっての刀鍛治であったと想像される。

二人の位牌は、今も薬王寺に残っている。現存する刀は三振りというが、所在は定かでない。

●カット　岩津中　米村　進

この本を

○児童の理解と指導　文部省
　文部省　220円
○話すということ
　―朗読源論への試み―　竹内　敏晴
　国土社　1,500円
○からだが語ることば　竹内　敏晴
　評論社　1,200円
○教科書を子どもが創る小学校　小松　恒夫
　新潮社　1,100円
○放課後の教室から　森下　竹二
　教育出版　980円
○共同学習　蛙の詩三篇　小沢　俊郎
　筑摩書房　1,200円
○バックミラーの証言　柄澤好三郎　NHK取材班
　日本放送出版協会　1,200円
○谷内六郎展覧会　谷内　六郎
　新潮社　480円
○私の手が語る　本田宗一郎
　精興社　1,200円
○にっぽん遊覧記　加藤　秀俊
　文芸春秋　1,100円

オアシス

折鶴を一羽一羽丁寧に折りためて、そっと大事にしまいこむ。全神経を指先に集中させて、精神統一とも、指先の訓練とも、また、美しいものへの憧れとも思われる遊び。

日本人の器用さは、こんなもの静かな生活の中から磨き育てられてきたのだが、さて今は……。

死んでいった人たちへの思いが八月はしきりとつのってくる。

雲流るる果て、わだつみに、死のために生きた人の記憶は今も鮮やかだが、今では、生きることだけが関心となっている。避けられぬ死とどう対面したらよいか。根源の生はそこにある。

死の哲学を求める八月である。

朝のあいさつにもいろいろな仕方がある。職員室で隣り座席の新卒のO先生は、学級びらき以来毎日、黒板日記を通して教室の子らと朝の対面をする。

暗くなった教室でただ一人、黒板にその日の思いを書きつづる。続けることは並大抵のことではない。子どもと居ることを愛するO先生である。

既にして三十七回目の八月十五日を迎える。「この重い体験」を特集したのは、狂瀾と昏迷の時代を生き抜いた人間・教師の魂の叫びに触れる必要を想うからである。

墨塗り掛地図や連合軍指令に対する報告書等、終戦直後から二十一年にかけての教育資料も発見。これも特集の余慶。